〔資 料〕

成功恐怖の再検討¹⁾²⁾

堀 野 緑

日本女子大学

A reconsideration of the study on "Fear of Success"

MIDORI HORINO (*Japan Women's University*)

The purpose of this article is to verify the existence of ambivalence in "Fear of Success" and the factor which cause it. Two investigation were carried out by undergraduate students (first investigation: 161 females and 193 males. second investigation; 139 females and 118 males). Questionnaires are composed of fear of success scale, which is almost the same as that used in many other studies, and scenario study, which measures how positively or negatively people consider their own and other people's success in a success situation. The results express ambivalence clearly in both females and males. And sex difference was qualitative rather than quantitative. Among females 'interests in others' was important factor for ambivalence, but among males 'little need for superiority' was important factor for ambivalence.

Key words: fear of success, gender difference, competition, ambivalence.

問 題 ・ 目 的

達成動機研究における男女差の問題に対する一つの答えとして、Horner (1968) は、“成功恐怖 (Fear of Success: 以下これをFSとする)”という概念を提出した。この理論によれば、能力もあり、達成動機も高い女性は、成功すると社会的に拒絶されるため、成功を恐れるという“両面価値 (アンビヴァレンス; ambivalence)”をもつという。このように、Horner は、FSを“男性、男性社会に対して成功することへの女性特有の両面価値”として捉えている。これに対し、その後の研究では、FSはむしろ成功や競争に対する価値観や対人的配慮という男性も共有する多面的動機として捉えられていることが多い。

しかし、今後のFS研究には、この“両面価値”の解明こそ意義ある課題と思われる。“両面価値”とは、一個人の中に、“成功したいという動機”とともに、まったく

その逆の“成功したくないという動機”が存在するということである。すなわち、達成動機自体は高くとも、FSが存在するために、達成行動が表出されないという可能性もありえるのである。このようにFSを捉えれば、FSは、社会における個人を理解する際の重要な手がかりの一つになり得ると考えられる。そこで、本研究では、FSにおける“両面価値”を解明することを第1の目的とする。

第2の目的は、FSの要因が、Hornerの捉えた‘女性に特有なもの’なのか、あるいは、男女に共通するものなのかを明らかにすることである。Horner (1968) は、特に競争場面でFSが現われることを指摘している。しかし、具体的な競争場面を設定している研究はそう多く見出せない。本研究では、競争場面を仮設し、この問題を検討する。

第3の目的は、なぜFSが現れるのかを男女別に明らかにすることである。Yamauchi (1986) は、FSには‘親

1) 本研究の一部は日本心理学会第52回大会で発表したものである。

2) 本論文作成にあたり、御指導いただきました日本女子大学宮本美沙子教授、岡野恒也教授、本間道子助教授、また、調査に御協力いただいた多くの先生方、学生の皆様に深く御礼を申し上げます。

和喪失の恐怖'と'成功の否定的感情'という二次元が存在し、女性のFSには前者、男性のFSには後者が要因となっていることを示している。この知見が本研究に適用できるか、また、各場面における感情とどのような関係があるのかを明らかにすることも興味深いことであろう。

この3つの目的のために、本研究では、従来のFS測定尺度とともに、競争の仮想実験として、実際の競争場面での成功を想定した。そして、それぞれの状況において、どのように主人公が感じ、周囲の人々が評価すると思うかを評定してもらった。成功の課題は、研究1ではまず、Hornerの課題に準拠した課題を設定した。

研 究 1

方 法

FS測定尺度1 Zuckerman (1976), Sadd & Lanauer (1978), 青柳・斎藤 (1984), Yamauchi (1986)などを参考に筆者が作成した18項目から成る。

FS測定尺度2 4つの仮想場面のうちの1つ(条件1:女性が1番で男性が2番, 条件2:男性が1番で女性が2番, 条件3:女性が1番で女性が2番, 条件4:無競争)を被験者にランダムに割り当て、それぞれの条件における主人公の成功に対して、主人公がどのように感じると思うかを評定する(12項目)。使用された文章は以下のとおりである。「花子さんは医学部の学生です。期末試験に1番の成績をとると大変名誉なことであり、奨学金ももらえるので、花子さんも同級生の太郎さんも1番の成績をめざしてがんばっていました。ある日、教授が皆の前で花子さんの成績が1番であったこと、惜しくも太郎さんは2位だったことを発表しました(条件1の場合)」

FS測定尺度3 FS測定尺度2の仮想場面の主人公の成功に対して、周囲の人々はどのように評価すると思うかを評定する(14項目)。

上記3尺度を「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」までの7件法により、1988年1月、都内近郊の4年制男女共学大学に在籍する1年生計354名(男性193名、女性161名)に実施した。仮説は3つ立てられた。仮説1:FSにおける両面価値(成功への肯定的感情をもつとともに成功への否定的感情をもつ)は存在する。仮説2a:FSが'女性に特有なもの'であれば、女性

におけるFSは、条件1(女性が1番で男性が2番)が他の3条件より有意に高い。仮説2b:FSが男女に共通するものであれば、競争の要因のみ影響するので、男女ともに条件4(無競争)が他の3条件より有意に低い。仮説3:女性性は親和的な要因、男性性は成功観がFSの原因となる。

結 果

FS測定尺度1 主成分分解・varimax回転法により因子分析したところ、固有値の変動および因子解釈から、3因子解を採用し、それぞれ、'対人的配慮'、'成功の否定的感情'、'優越欲求の少なさ'と命名した(Table 1)。 α 係数による信頼性は、'対人的配慮'が.78、'成功の否定的感情'が.76、'優越欲求の少なさ'が.75であった。それぞれの因子に負荷量の.40以上の項目の加重平均値を算出し、その値を下位尺度得点とした。そして、その値で t 検定(両側検定)により性差をみたところ、'成功の否定的感情'の平均値($t=-3.53$, $p<.001$)に有意な性差が見られた(どちらも女性>男性)。

FS測定尺度2・3 それぞれ別に主成分分解・varimax回転法により因子分析したところ、FS測定尺度2では、“自己の成功の肯定的感情”と“自己の成功の否定的感情”の2つ、FS測定尺度3では、“他者の成功への肯定的感情”と“他者の成功への否定的感情”の2つというほぼ筆者の想定した因子が現れた³⁾。 α 係数による信頼性は、“自己の成功の肯定的感情”が.65、“自己の成功の否定的感情”が.68、“他者の成功への肯定的感情”が.64、“他者の成功への否定的感情”が.70であった。同じくそれぞれの因子に負荷量.40以上の項目の加重平均値を算出し、それぞれの下位尺度得点とした。この値をTable 2に示す。

次にFS測定尺度2・3における下位尺度の性差・条件差であるが、まず、FS測定尺度1の下位尺度においては分散分析により条件の主効果は見られず、条件による被験者の違いはないことが明らかになった。そこでFS測定尺度2・3それぞれの下位尺度において、被験者の性と条件の2要因の分散分析を行ない、主効果がみられたところでは、Student-Newman-Keulsの多重比較($p<.05$)を行った。

その結果、“自己の成功の肯定的感情”において性の主効果($F=11.45$, $df=1$, $p<.001$, 女性>男性)が見られた。“自己の成功の否定的感情”においては、性の主

3) “自己の成功の肯定的感情”の例:うれしい、がんばろう。“自己の成功の否定的感情”の例:他の人に悪い気がする、プレッシャーが大きい。“他者の成功への肯定的感情”の例:この人はいい人だと思う、まわりから親しまれていると思う。“他者の成功への否定的感情”の例:この人は感じが悪いと思う、友達が少ないと思う。

堀野：成功恐怖の再検討

Table 1
F S 測定尺度 1 の因子分析：varimax 回転後の負荷量

	I	II	III	h^2
成功して目立ってしまうと、陰であざ笑われてしまう気がする	.77	.11	.10	.61
何かに成功したら、誰かが悪口をいわないかと心配になってしまう	.75	.16	.11	.59
何かに成功すると人を出し抜いたのではないかという後ろめたさを感じる	.70	.08	.37	.62
成功した人は、冷淡できどり屋だと他人から思われると思う	.66	.14	.15	.48
何かを他人よりうまくやろうとすると、多くの友達を失うかもしれないと思う	.66	.24	.02	.49
成功者というものは、さびしく孤独なことが多いと思う	.57	.31	-.02	.43
適当に力を抜いてやった方が、失敗した時に恥をかかない	.42	.12	-.04	.19
成功ということが、我々の社会では協調されすぎてきたと思う	-.16	.71	.22	.58
すべての勝利者のかげには、他人から疎外された不幸な敗者がいると思う	.23	.58	.01	.39
成功すると、非常に大きな責任をしょいこむことになると思う	.30	.57	.11	.43
トップにいると責任感が心が休まらないと思う	.33	.53	-.03	.40
テストで一番になったら、次のテストの時にプレッシャーを感じて大変だと思う	.21	.42	-.01	.23
成功によって失うものは、しばしば、成功によって得るものより多いと思う	.33	.40	.12	.23
(一) 成功することは重要だと思う	-.25	.04	.64	.47
他人と競争する場合、勝った時よりも、負けた時の方が後味がよいことが多い	.05	.22	.64	.40
他人に自分のしたことをほめられるときまりが悪い	.28	.01	.57	.40
人と競争して勝つと負けた人に悪いと思う	.18	.27	.56	.42
(一) 何かに成功したら、みんながほめてくれると思う	.11	-.30	.54	.40
寄与率	20.28	12.51	11.46	44.25

因子 I：対人的配慮 (F S 1)

因子 II：成功の否定的感情 (F S 2)

因子 III：優越欲求の少なさ (F S 3)

注) (一) は反転項目を示す

Table 2
F S 測定尺度 2・3 における各肯定・否定感情の平均値

		条件 1 女>男	条件 2 男>女	条件 3 女>女	条件 4 無競争	全 体
自 肯 定	男	5.03(.72)	5.09(.90)	5.09(.84)	5.14(.79)	5.09(.81)
	女	5.36(.74)	5.39(.62)	5.14(.79)	5.57(.82)	5.37(.76)
	全 体	5.18(.75)	5.23(.79)	5.11(.81)	5.32(.83)	5.21(.80)
自 否 定	男	4.05(1.08)	3.60(1.14)	4.23(.99)	3.43(1.01)	3.81(1.11)
	女	4.15(.97)	4.22(.67)	3.88(1.17)	3.99(1.11)	4.06(1.00)
	全 体	4.10(1.03)	3.87(1.01)	4.07(1.08)	3.65(1.08)	3.91(1.06)
他 肯 定	男	4.71(.84)	4.54(1.18)	4.72(.78)	4.88(.56)	4.78(.75)
	女	5.14(.45)	4.97(.59)	4.93(.44)	5.21(.66)	5.06(.55)
	全 体	4.90(.72)	4.87(.73)	4.81(.65)	5.01(.62)	4.90(.68)
他 否 定	男	4.44(1.08)	3.54(1.08)	4.37(1.08)	3.95(.86)	4.31(1.06)
	女	4.71(.76)	4.61(.79)	4.24(1.02)	4.13(1.17)	4.43(.98)
	全 体	4.56(.96)	4.58(1.01)	4.31(1.05)	4.02(1.00)	4.36(1.03)

自肯定：自己の成功の肯定的感情

自否定：自己の成功の否定的感情

他肯定：他者の成功への肯定的感情

他否定：他者の成功への否定的感情

効果($F=4.37$, $df=1$, $p<.05$, 女性>男性), 条件の主効果($F=3.48$, $df=3$, $p<.05$, 条件1・条件2・条件3>条件4)および, 性と条件の交互作用($F=3.90$, $df=3$, $p<.01$)がみられた。交互作用が見られたので, 男女別に条件の要因で分散分析を行った。女性には条件差が見られず($F=0.85$, $df=3$, $n.s.$), 男性には条件1・条件3>条件2・条件4の有意な差が見られた($F=6.29$, $df=3$, $p<.005$)。“他者の成功への肯定的感情”では性の主効果($F=16.98$, $df=1$, $p<.001$, 女性>男性)が見られ, “他者の成功への否定的感情”では条件の主効果($F=6.18$, $df=3$, $p<.001$, 条件1・条件2・条件3>条件4)が見られた。

FSの要因 仮想場面における肯定的並びに否定的な感情はどのような要因によるのかを明らかにするために, FS測定尺度1の3要因を説明変数, FS測定尺度2・3を従属変数として重回帰分析を行った(Table 3)。FS測定尺度1の3要因は互いに相関を持つので, ここでは因子得点を使用する。

まず, 全体では, 以下のような結果が見られた。‘対人

的配慮’は, “自己の成功の否定的感情”(.33, $p<.001$)および“他者の成功への否定的感情”(.22, $p<.001$)に正の, “他者の成功の肯定的感情”(−.11, $p<.05$)に負の有意な標準偏回帰係数をもつ。しかし, ‘優越欲求の少なさ’は, “自己の成功の否定的感情”に負の有意な標準偏回帰係数(−.29, $p<.001$)をもつものの, “他者の成功への肯定的感情”にも正の有意な偏回帰係数(.14, $p<.05$)をもつ。また, “成功の否定的感情”は2つの肯定的感情, および, 否定的感情すべてに正の有意な偏回帰係数をもっていた(“自己の成功の肯定的感情”(.15, $p<.005$), “自己の成功の否定的感情”(.36, $p<.005$), “他者の成功への肯定的感情”(.16, $p<.005$), “他者の成功への否定的感情”(.26, $p<.001$)。

また, これを男女別に見ると, 男性と女性では異なる標準偏回帰係数が見られる。男性は“自己の成功の肯定的感情”以外では女性よりも‘成功の否定的感情’と‘優越欲求の少なさ’により大きな標準偏回帰係数をもっており, 対照的に女性は, 男性よりも‘対人的配慮’により大きな標準偏回帰係数をもっていた。

Table 3
重回帰分析の結果 (数値はすべて標準偏回帰係数)

説明変数 (FS測定尺度1)	自肯定	自否定	他肯定	他否定
全体				
対人的配慮	−.03	.33****	−.11*	.22****
成功の否定的感情	.15***	.36****	.16***	.26****
優越欲求の少なさ	−.29****	.19****	.14*	.04
寄与率 (R ² 値)	.11****	.27****	.05***	.16****
重回帰係数	.33****	.52****	.22***	.40****
男子				
対人的配慮	−.02	.29****	−.08	.23****
成功の否定的感情	.13†	.38****	.21***	.30****
優越欲求の少なさ	−.33****	.23****	−.17*	.09
寄与率 (R ² 値)	.12****	.26****	.08***	.14****
重回帰係数	.35****	.51****	.28***	.37****
女子				
対人的配慮	−.07	.43****	−.12	.20*
成功の否定的感情	.18*	.26****	.02	.16†
優越欲求の少なさ	−.22**	.10	−.06	−.04
寄与率 (R ² 値)	.09**	.30****	.02	.08**
重回帰係数	.30**	.55****	.14	.28**

† $p<.1$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.005$ **** $p<.001$

考 察

本研究では、従来の研究のように単に個人の成功恐怖が高いか低いかを測定するだけでなく、仮想場面における反応を測定し、肯定的感情と否定的感情を二次元に捉えている。Table 2 が示すように、自己の成功や他者の成功に対する肯定的感情が高いといっても、否定的感情が必ずしも低いわけではない。つまり、この2つの感情はまったく正反対であるとは言い難い。成功に対し、肯定的感情をもちつつも、否定的感情をもつ場合も存在する。また、重回帰分析では、‘成功の否定的感情’において2つの肯定的感情、および、否定的感情すべてに正の有意な標準偏回帰係数が見られた。この結果からも、肯定的感情をもちながらも、否定的感情をもつという両面価値がうかがえる。以上の結果から、FSにおける両面価値の存在は明らかになり、仮説1は支持された。

次に、両面価値はどのような要因によるのかであるが、まずFS測定尺度1では、全体的に女子の得点が高い。ほぼ同じような質問紙によるYamauchi (1986) の研究では、女性は本研究の‘对人的配慮’にほぼ対応すると思われる‘親和喪失の恐怖’が高く、男性は‘成功の否定的感情’が高いという結果が示されている。しかし、本研究ではこのような男女の対比的な結果は見られなかった。

仮想場面においては、女性の方が男性よりも、条件3以外は肯定的感情も否定的感情も有意に高く、肯定的感情と否定的感情の差は少ない。つまり、女性の方が両面価値をもちやすいという結果が見られたと言える。しかし、仮説2aのように、女性が男性に勝つことに対して、他の条件に比べて、有意に肯定的感情が低まったり、否定的感情が高まったりという結果は見られなかった。むしろ、無競争という条件4が有意に他の条件と異なっており、仮説2bを支持する結果となった。つまり、FSは、‘女性に特有なもの’というよりも、男女に共通した一種の‘競争’恐怖とも考えられよう。

しかしながら、Table 2 を参照して見ると、男女が異なるパターンをもっていることが推察される。特に、交互作用が有意であった“自己の成功の否定的感情”では、女性には条件差が見られず、男性には、条件1・条件3 > 条件2・条件4という差が現れている。もし、男性にとって“女性が女性に勝つ”という条件3が“1番も2番も女性であり、女性は男性より勝る”という意味になるならば、条件1・条件3の2つとも“女性が男性に勝った”ということである。すなわち、男性は、“男性に勝った女性は否定的な感情をもつ”と想像したのではないだろう

か。

また、重回帰分析において性差を考察してみると、性差はより明確に現れていた。すなわち、男性にとって‘成功の否定的感情’や‘優越欲求の少なさ’という要因が、また、女性にとっては‘对人的配慮’という要因がFSにおいて重要な要因であった。つまり、仮説3は支持されたと考えよう。

ただし、仮説2aが支持されなかった理由には、課題の問題に起因しているとも考えられる。今日の日本社会において、学業の場面において女性が男性に勝つことが、直接社会的な成功に結びつくとは言い難いからである。すなわち、集団における個人の成功という、より社会的要因を含む課題こそ、Horner (1986) の男性社会での成功により近い課題であろうと思われる。その課題でこそ、女性は、女性が男性に勝つという場面において、有意にFSを高く示すという仮説を立てる(仮説4)。また、社会的リーダーシップの要因を含む課題では、三隅(1970)のPM理論が示すように、集団における遂行(performance)だけでなく、集団の維持(maintenance)という側面が重要視されると考えられる。そこで、女性だけでなく男性においても、FSを規定する重要な要因には、‘对人的配慮’が挙げられるという仮説を立てる(仮説5)。

以上の仮説検証のために、課題を変えて研究2を行った。また、女性が女性に勝つという条件3に対して、解釈が推測の域を出ないところから、研究1で明らかに差が出た条件4の‘無競争’という場面を外し、競争相手が男性と男性という場面を設定した。

研 究 2

方 法

FS測定尺度1 研究1と同様の尺度

FS測定尺度2 4つの仮想場面のうちの1つ(条件1：女性が1番で男性が2番、条件2：男性が1番で女性が2番、条件3：女性が1番で女性が2番、条件4：男性が1番で男性が2番)を被験者にランダムに割り当て、それぞれの条件における主人公の成功に対して、主人公がどのように感じると思うか評定する(12項目)。使用された文章は以下のとおりである。「浩子さんは大学で大きなサークルに入っています。このサークルの代表者になるのは名誉なことであり、またやりがいのある仕事ができます。浩子さんもサークル仲間の明くんも代表者に選ばればよいなと思っていました。ある日、皆の

投票の結果、浩子さんが代表者に選ばれ、明くんは補佐として浩子さんを助ける役目に任命されました。(条件1の場合)

F S測定尺度3 F S測定尺度2の仮想場面の主人公の成功に対して、周囲の人々はどうのように評価すると思うか評定する(14項目)。

上記の3尺度を「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」の7件法により、1988年6月、都内近郊の4年制男女共学大学に在籍する大学1年生男女計257名(男性118名、女性139名)に実施した。

結 果

F S測定尺度1 研究1に基づき、それぞれの下位尺度を作成した。そして、それぞれにおける性差(t 検定, 両側検定)を見た。すると、「成功の否定的感情」($t = -4.06, p < .001$)に有意な性差と、「優越欲求」の少なさに有意な性差の傾向($t = -1.81, p < .1$)が見られた(すべて女性>男性)。

F S測定尺度2・3 それぞれ別に主成分分解, および, varimax 回転法により因子分析したところ, 研究1と同様に, F S測定尺度2では“自己の成功の肯定的感情”と“自己の成功の否定的感情”の2つ, F S測定尺度3においては“他者の成功への肯定的感情”と“他者の成功への否定的感情”の2つという因子が抽出された。 α 係数による信頼性は, “自己の成功の肯定的感情”が.69, “自己の成功の否定的感情”が.66, “他者の成功への肯

定的感情”が.68, “他者の成功への否定的感情”が.72であった。それぞれの因子につき負荷量.40以上の項目の加重平均値をそれぞれの下位尺度得点とした。この値をTable 4に示す。

研究2においてもF S測定尺度1の全体や各因子において条件による有意な差は見られなかった。そこでF S測定尺度2・3の各要因において, 被験者の性と条件の2要因の分散分析を行ない, 性と条件の主効果が見られたところではStudent-Newman-Keulsにより多重比較($p < .05$)を行った。また性と条件の交互作用が見られたところでは, 研究1と同様に条件の1要因の分散分析を行った。

“自己の成功の肯定的感情”において性の有意な主効果($F = 16.21, df = 1, p < .001$, 女性>男性)が, “自己の成功の否定的感情”において性の有意な主効果の傾向($F = 4.90, df = 1, p < .1$), 条件の有意な主効果($F = 4.90, df = 3, p < .01$, 条件3・条件1>条件2・条件4), 性と条件の交互作用($F = 8.17, df = 3, p < .001$)が見られた。この交互作用は, 男性は条件3>条件2・条件1・条件4($F = 5.83, df = 3, p < .005$), 女性は条件1>条件3・条件4・条件2($F = 7.80, df = 3, p < .001$)という差から現れているものであった。“他者の成功への肯定的感情”では, 性の有意な主効果($F = 22.93, df = 3, p < .001$, 女性>男性)が, “他者の成功への否定的感情”では条件の有意な主効果($F = 4.19, df = 3, p < .01$, 条件1・条件3・>条件2・条件4)が見られた。

Table 4
F S測定尺度2・3における各肯定・否定感情の平均値

		条件1 女>男	条件2 男>女	条件3 女>女	条件4 男>男	全 体
自 肯 定	男	5.48(.71)	5.48(.80)	5.45(.77)	5.57(1.01)	5.50(.83)
	女	5.59(.56)	5.98(.63)	5.81(.65)	5.97(.52)	5.85(.61)
	全 体	5.53(.63)	5.73(.76)	5.63(.73)	5.77(.83)	5.67(.74)
自 否 定	男	3.56(.88)	4.06(.94)	4.59(.74)	3.83(.97)	4.09(.99)
	女	4.91(.69)	3.92(.78)	4.25(.95)	4.17(.94)	4.28(.91)
	全 体	4.37(.95)	3.99(.86)	4.41(.86)	4.00(.97)	4.19(.93)
他 肯 定	男	4.77(.94)	4.92(.80)	4.98(1.03)	5.14(.86)	4.96(.91)
	女	5.42(.66)	5.38(.72)	5.38(.68)	5.53(.77)	5.43(.71)
	全 体	5.04(.87)	5.15(.79)	5.19(.88)	5.33(.83)	5.19(.84)
他 否 定	男	3.12(.88)	3.04(.90)	3.26(1.05)	2.94(.93)	3.09(.94)
	女	3.43(.61)	2.68(.76)	3.16(.89)	2.82(.94)	3.00(.86)
	全 体	3.27(.77)	2.85(.84)	3.21(.97)	2.88(.93)	3.04(.90)

Table 5
重回帰分析の結果（数値は全て標準偏回帰係数）

説明変数 (F S測定尺度1)	自肯定	自否定	他肯定	他否定
全体				
対人的配慮	-.06	.49****	-.10 [†]	.38****
成功の否定的感情	.19***	.16***	.20****	.08
優越欲求の少なさ	.26****	.01	.07	-.02
寄与率 (R ² 値)	.11****	.27****	.05***	.16****
重回帰係数	.33****	.52****	.22***	.40****
男子				
対人的配慮	-.02	.46****	-.14	.35****
成功の否定的感情	.18*	.14 [†]	.13	.13
優越欲求の少なさ	.33****	.09	.17 [†]	-.12
寄与率 (R ² 値)	.14****	.24****	.07*	.16****
重回帰係数	.37****	.49****	.26*	.40****
女子				
対人的配慮	-.11	.52****	-.05	.43****
成功の否定的感情	.07	.16*	.13	.08
優越欲求の少なさ	.21*	-.05	-.04	.08
寄与率 (R ² 値)	.06 [†]	.30****	.02	.20****
重回帰係数	.24 [†]	.55****	.14	.45****

† $p < .1$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .005$ **** $p < .001$

F Sの要因 F Sがどのような要因によるのかを明らかにするために、研究1と同様に重回帰分析を行なった (Table 5)。F S測定尺度1の各因子はやはり互いに相関をもつので、因子得点を使用した。Table 5を参照すると、研究2では、研究1と異なるところも見られる。‘対人的配慮’は、“自己の成功の否定的感情” (.49, $p < .001$)、“他者の成功への否定的感情”に正の有意な (.38, $p < .001$)、“他者の成功への肯定的感情”に負の有意な傾向 (- .10, $p < .1$) の標準偏回帰係数をもつ。‘優越欲求の少なさ’は、“自己の成功の肯定的感情”に正の有意な (.26, $p < .001$) 標準偏回帰係数をもつ。また、‘成功の否定的感情’は、“他者の成功への否定的感情”以外にやはりすべての有意な標準偏回帰係数をもった。次に、男女別に分析を行ったところ、男性と女性では、多少異なる標準偏回帰係数が見られたが、研究1ほど男女差は明確ではなかった。研究1と異なり、男女とも‘対人的配慮’が重要な要因となっていた。

考 察

成功の課題を“学業での成功”から“リーダーシップをとる上での成功”へと変えることによって、より成功恐怖の両面価値を明確に捉えるのではないかという仮説の検証を試みた。その結果、“自己の成功の感情”において、条件によってより明確な両面価値が見られ、しかも性差が明確に表出されていた。

女性は、他者の成功では条件1（女性が男性に勝つ）を高く評価しながらも、自己の成功になると一番否定的感情が高い。ゆえに、両面価値が大きい。それに反して、男性は、“他者の成功への否定的感情”において、条件1と条件3（女性が女性に勝つ）が高い。男性が男性に勝つという、“同性同士”という意味では同様の条件2では、このような結果は示されていない。そこで、条件3を上述のように、“女性が1番と2番を占めて男性に勝つ”というように解釈するならば、ここでHorner(1968)の指摘する“女性が男性に勝つということに対する成功恐怖”は男性の考える女性像において見られると言えよ

う。これらの結果から、仮説4は部分的には支持されたものの、より解明する問題があると思われる。

また、標準偏回帰係数が研究1ほど男女によって異なる大きな原因の一つは、課題の問題であると思われる。つまり、“リーダーシップをとる上での成功という課題のように、学業上の成功よりも、より社会的対人的な問題においては、‘対人的配慮’は男女にとって共通して重要な要因なのである。そしてその次に、‘優越欲求の少なさ’が重要な要因として現れている。これも男女に共通して重要な要因である。以上の結果は仮説5を支持するものである。すなわち、社会的リーダーシップをとる上では、男女に共通して‘対人的配慮’が必要であると認識されていると思われる。一方、リーダーシップをとることに對して、否定的になることも、‘成功への価値観’という、男女に共通した原因をもつと考えられる。

今後は、FSの要因が課題によってどう異なるか、また、発達のどのようになっているかなどを検討することなど、さらに研究を深める必要があろう。

引用文献

青柳 肇・斎藤浩子 1984 成功回避動機に関する研究

その9 一親和動機との関連— 立川短大紀要, 16, 23-33.

Horner, M. S. 1986 Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situation. Unpublished Ph. D. thesis University of Michigan.

三隅二不二 1970 組織におけるリーダーシップの研究 年報社会心理学, 11, 63-90.

Sadd, S., & Lanauer, M. 1978 Objective measurement of fear of success and fear of failure: A factor analytic approach. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 46, 405-416.

Yamauchi, H. 1986 A factorial analysis of achievementrelated motives measured by revised-ARMS. *Psychologia*, 29, 72-79.

Zuckerman, M., & Allison, S. N. 1976 An objective measure of fear of success: Construction and validation. *Journal of Personality Assessment*, 40, 422-431.

(1990年4月1日 受稿)
(1991年1月10日 受理)